

税がくれた贈り物

羽島市立中央中学校1年 山田 桃花

令和四年二月、心優しかった祖父が天国へ旅立ちました。ステージIVの末期がんが見つかってから約二年間、病気に打ち克つためにつらい抗がん剤治療を続けました。治療は三週間おきに通院し、抗がん剤の点滴投与を受けるものでした。通院に付き添っていた祖母からこんな話を聞いたことがあります。

「治療には毎月高額な医療費がかかるけれど、国民健康保険の高額療養費制度のおかげで病院へ支払うのは、所得ごとに決められた限度額まで済むの。本当にありがたい。」

その時はあまり気に留めていなかったけれど、祖父が使った限度額以上の医療費を誰が負担してくれていたのか気になり、調べてみました。すると、被保険者から徴収した保険料の他に税金が使われていることが分かりました。祖父が医療費の心配なく治療を続けることができたのは、税のおかげだったことを初めて知りました。また、祖父は病気の進行に伴い、介護が必要になりました。そのため、介護保険制度の要介護認定を受け、デイサービスなどの介護サービスを利用していました。入浴介助を受ける祖父だけでなく、一緒に暮らしていた祖母の負担も軽減されました。そして、この介護保険制度にも税金が使われていました。祖父の病気が分かってから、こんなにも税の恩恵を受けていたのだと気づき、改めて感謝しました。毎週末、祖父と一緒に祖母の手料理を食べられたこと、孫である私の話を笑顔で聞いてくれたこと、祖父と共有できたこの時間は、私達家族にとってかけがえのないものでした。まさに税がくれた贈り物だと思っています。

私はこれまで、「税金は本当に必要なのか？」と漠然と思っていました。中学生の私に一番身近な税金である「消費税」は、コンビニで買い物をした時などにその代金に上乗せして負担しています。物価高騰が叫ばれる今、消費税の存在は一層負担に感じられ、税金に対するイメージは決して良いものではありませんでした。しかし、今回この作文を書くにあたり、税金について調べ、考えることによって、税金への思いが一八〇度変わりました。私達が何気なく納めている消費税が年金・医療・介護・少子化対策などの社会保障政策に使われていることを知ったからです。国民が納める税金があるからこそ、私達の不自由ない暮らしが守られているのです。私達は税金に対する負担感ばかり大きくて、税金から受ける恩恵を当たり前に感じてしまっているのではないか。祖父が税に助けてもらったように、私が納めた税金が日本のどこかで、誰かを笑顔にしているのだと思うと誇らしいです。学生である今は「消費税」という形でしか納税できないけれど、近い将来、もっといろいろな形で税金を納めることになるでしょう。その時はきちんと納税し、社会に貢献できる人になりたいです。きっと天国の祖父も喜んでくれると思います。